



2012 年 6月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 44

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 36 (聞き手 高橋素子)

高橋 > 八十五の翁となれど母おもへばただになつかし今日は母の日 窪田空穂

上の子は足だけ母にふれて寝る 丸山弓削平

小春日の空に広がり母焼く煙 八木健

遺影の母を残して冬の汽車に乗る 八木健

今年もまた、母の日がやって来ました。様々な母への感謝の気持や追慕の念が募るのもこの日ですが、今日は、上記の短歌・川柳・俳句の名歌・名句に、ほろりとさせられる郷愁の思いをつのらせて戴きたいと思います。会長がこの句をお詠みになったのは、確か平成二十二年の十一月…。お母様がお亡くなりになって、もう一年半の年月が経ってしまったのですね。

かけ継ぎの得意な母や夜の秋 八木健

ふかし藪戸棚に残し母は田に 八木健

窪田空穂の歌のように、いくつになっても人は母の子。本日はお母様の思い出をお聞かせ下さいね。

会長 > 良く喋る後姿の大根干

という句を詠んだことを思い出しました。私の実家は、静岡県の実家でした。母は子育てから農家の嫁としての仕事まで大変だったと思います。

手仕事のいろいろ母の夜なべかな

針仕事が得意でした。パッチワークが好きで、晩年までパッチワークを生きがいにしていて、九十歳過ぎても作品展を開いていました。記憶力が抜群で孫やひ孫全員の生年月日を諳んじていました。

自転車に乗れないので、私が子どもの頃には私を「おんぶ」して徒歩でどこへでも出掛けていました。看板の文字を読んでくれたので、就学前に漢字を読めるようになりました。だから、兄が小学校に入学する時に、自分も入学したいと言って困らせました。「早く入学しないと年とっちゃう」と言ったそうです。父は地方競馬の騎手をして留守がちでしたから、私は母の背中を見て育ちました。

漬物にする気西瓜の皮捨てず

そんな母でした。それでも母は「勉強しなさい」などとは、一度も言いませんでしたし、上京して進学した私のことを近所の方から尋ねられた時に「東京の学校へ行ってます」と答えたそうで、日大芸術学部なんて、田舎者の母は知らないですからね。母は私の虚弱体質を心配していて、「風邪ひくな」が口癖でした。

高橋 > 有難うございます。私もついほろりとさせられてしまいました。さて、本題に参ります。本日は前回に続いて、紅緑偏「滑稽俳句集」の「冬天文」の部、季語は「凧」です。

木枯やうんと仁王の力足 菊居

凧に豆の葉荷ふ人をかし 曉臺

木枯をひねり歩行や階子賣 五明

凧や大佛殿はつんぽなり 子規

凧に抱合ふ雌松雄松かな 鳴雪

擬人化ですから、大仏殿は「だいぶつどの」、雌松雄松は「めまつおまつ」と読みますね。それでは、ご解説よろしくお願い致します。

会長 > 「木枯やうんと・・・」、「木枯」は木を枯らすほどの風が語源ですから「寒い」。寒さを堪えるのに全身に力を込めるものです。仁王様は裸身に近い。だから、力を込めているのがよく分かります。「うんと」と、まるで生きているように描いて面白い句です。

「凧に豆の葉・・・」、豆を収穫して担いで運んでいるのでしょう。強い風を避けるのに好都合とばかり風上に荷を向けて運んでいたものと思われます。

「木枯をひねり・・・」、階子は、はしごのことですね。梯子を運ぶのに強風で煽られて大変。傾きを修正しながら運ぶ様子を木枯を捻ると見立てたものです。

「凧や大佛殿は・・・」、「つんぽ」は聾のことで、今では差別用語です。子規の句には、こうした差別用語がたくさん出てきますので、学術的引用意外は扱いにくいものです。大佛さまは、木枯の音が聞こえないらしい。句はこのように表現することで、風音の強さを言っています。

「凧に抱合ふ雌松・・・」、雌松雄松が風を堪えて抱き合うとしています。

高橋 > 鳴雪は凧に絡み合う雌松・雄松を「抱き合う」と面白く擬人化した滑稽句を詠んでいますね。「つんぽ」の様に、現在、不愉快に感じられる言葉は、避けた方が良いでしょう。子供のころ、まるで親戚の人のように、親しみをこめて呼んでいた「小遣いのおじちゃん」とか、「学研のおばちゃん」とかが、「言葉狩り」にあって、「用務員さん」とか、「〇〇レディ」と呼ぶ様になると言われても戸惑いを感じてしまいます。「差別用語」の定義の行過ぎもまた情緒が失われがちで、難しいものですね。

会長 > そうですね。昔の言葉の持つ情緒、趣は俳人としても大切にしなければなりません。誰かが不愉快に感じる言葉や、悪意や軽蔑を込めた使い方は、迂闊にはいけないということでしょうね。

高橋 > また、お話が少し横道にそれました。次の季語に参りますね。次の季語は「初雪」ですよ。

初雪に隣を顔でをしへけり 野坡

初雪の出来そこなうて霰かな 蕪村

初雪や道がわるいとぬかしをる 龍眠

会長 > 「初雪に隣を顔で・・・」、声を出さずに「お隣ですよ」と顔で教えたものですね。
「初雪の出来そこなうて・・・」、初雪は句に詠む風情があるのに、「あられ」では句に詠みにくい。この霰は初雪の出来損ないだと、文句たらたらです。

「初雪や道がわるいと・・・」、「ぬかす」は「言う」の意味です。初雪は愛でるもの。句では「初雪」を言わず、「道のこと」をあげつらう無粋な奴が居るものだとしています。

高橋 > 「ぬかす」・・・、そう言えば東海道中膝栗毛にも「ふざけたことをぬかすな」等という台詞があったような気がします、俳句に堂々と使われるのですね。次の季語「雪」に参ります。

鍵になり長刀になり杉の雪 沾徳

重るや雪のある山ただの山 加生

夜の雪寝よともいはぬあるじ哉 太祇

ちと足らぬ僕や隣の雪も掃く 一茶

むまさうな雪がふうはりふうはりと 一茶

雪の戸や押せば開くと寝てて言ふ 一茶

ご説明よろしくお願ひ致します。

会長 > 「鑓になり長刀になり・・・」、鑓は「やり」と読みます。鉾(ほこ)に類似のものから変化したもので、長い 柄の先端に剣状の刃物(穂)を付けたものです。杉の葉に雪がさいているかたちが鑓、長刀に似ている ということです。杉の葉には雪がつきやすいからですね。

「重るや雪のある山・・・」、名も知れぬ山が重なっている。かさなりあって雪山の風景として圧巻の存在感なのでしょう。句に詠みたいが、名もない山であるということです。

「夜の雪寝よともいはぬ・・・」、雪の夜だから、早く寝なさいと、言うかと思ったら言わない。あるじは雪の夜を楽しんでいるので、言わないのです。

「ちと足らぬ僕や隣の・・・」、雪掃きをしている下僕が掃きたりないからと隣家の雪も掃くということではなく、「ちと足らぬ」は差別的表現で、この句は下僕の知能が足りないと言っているのです。「下僕」は、「しもべ」と読みますね。

「むまさうな雪がふうはり・・・」、「むまさうな」は、「うまそうな」ということですね。感じたままを描く一茶の真骨頂です。

「雪の戸や押せば開くと・・・」、誰かが訪ねてきたのでしょうか。作者は「戸は押せば開くよ」と寝ていて言うというのでから、親しい関係なのでしょう。

高橋 > 「むまさうな・・・」の句は、一茶らしいですね。旧仮名遣では、「うまそう」と書かずに「むまさう」と「う」が「む」になるわけですね。

会長 > 昔は原文一致で「む」と発音したから「む」なのです。発音が変化して、現代は「う」になったために、「ずれ」が生じているわけです。

高橋 > 成る程、「言う」を「言ふ」とするのも、かつては、そのように発音したということですね。

会長 > そうです。旧仮名は当時の原文一致の表現で、時代とともに発音が変化したのに、文字はそれにつれて変化しないで残ったというわけです。

高橋 > 成る程！そういう事なのですね。次に参ります。季語は「吹雪」と「雪達磨」です。
分かりやすい、文字通りの句のようですが、ひと言ご説明下さいね。

しばし待て目も口もあかぬ吹雪なり 一毫

雪達磨鼻の先から解けてゐる 鬼來

会長 > 「しばし待て・・・」、しばし待てば止むだろうということですね。「目も口もあかぬ」
は、かなりの猛吹雪です。

「雪達磨鼻の先から・・・」、雪達磨の鼻は、炭を使うのですから、鼻の先は分かり
やすく言うために言ったのでしょう。これが顔の先では分からない。

高橋 > 有難うございました。今日も、楽しいお話は尽きませんが、残念ながら、お時間
になってしまいました。この続きはまた次回にお願いしまして、本日もやはり最後は虎
造節で〆て下さいね。

会長 > はい、はい、それでは、雪だるまのひと節を。
♪目と口をおおお 雪にふさがれ 雪だるうまあ
吹雪を堪えて立ち尽くすううう
手足なければ逃げるもならず 風呂に入るは
なほ怖いいいい 丁度時間となりましたあああ
また来月のお楽しみいいいいいい♪